

発表題目:戦後期レヴィナスにおける「ドラマティックな出来事」の解釈と展開  
——『全体性と無限』における「思考」と「出来事」を巡って——

氏名:小野和

所属:慶應義塾大学大学院 文学研究科哲学専攻 修士二年

哲学史において、知の担い手たるわれわれがどのように存在しているのかというのは幾度も取り組まれてきた問いだと言える。この問いに、ドイツの現象学者マルティン・ハイデガーは、被投性や事実性という語のもとに次のように答えた。すなわち、能動的に何かを思い浮かべたり、何かを取り扱ったりするのに先立って、われわれはつねにすでに、いわばどうしようもなく受動的に、何かに関わりつつ存在しなければならないという仕方で、存在している。われわれは特定の世界へと投げ込まれているのであり、またそのつどすでに事実的な仕方で存在しているのである。

本発表の基本的な企図は、フランスの現象学者エマニュエル・レヴィナスが、こうしたハイデガーの議論を、どのように深化させつつ引き継ぎ、自らの重要な概念枠組みとして採用したかを素描することである。

ところで、レヴィナスはその名著『全体性と無限』の序文において、明確に、「意識」と「意識が成し遂げる出来事」を対比させて語っている。様々な言葉でこの「意識が成し遂げる出来事」は語りなおされるが（「意識の受肉」、「意識の現実態」、「思考をはみ出す忘れられた経験」、フッサールの意識に属さないような「思考には思いもつかない地平」、等々）、問題となっているのはつねに「意識」と「出来事」の対比である。この対比は、同書が採用する「現象学的方法」の内実理解に関わっているために、同書が遂行するプロジェクトの理解を左右する重要な概念対である。

ところが、この「意識が成し遂げる出来事」の内実とはいうと、その重要さに比して、あまり検討されては来なかった。一方ではジャンコーやデリダらが当該箇所について読解を行ってはいないものの、レヴィナスの議論の枠組みがフッサールのそれを踏襲していないと指摘するにとどまっている。他方でモアティは当該箇所の読解について、レヴィナス自身の第二次大戦後のテキストを示唆する重要な指摘をいくつもを行っているが、その指摘は十分に論証されているとは言い難い。

それゆえ、本発表は『全体性と無限』の序論を手引きとして、同書における「意識」と「出来事」の関係についての理解を前進させることを試みる。その際、方法的な手順として、戦後期レヴィナスにおける「意識(思考)」と「出来事」についての規定を参照する。『実存から実存者へ』(1947)においてレヴィナスは「出来事」概念に明確な規定を与えており、「意識」と「出来事」の関係についても答えを与えているからである。さらに同書で用いられる「ドラマ」という言葉を起点として「存在論は根源的か？」(1951)の論述と接合することで、『実存から実存者へ』における「出来事」論をハイデガーの被投性概念の受容と深化において位置づけることを試みる。最後に、以上の成果を踏まえて『全体性と無限』序文を再び解釈しなおすこととする。

本発表の結論からいえば、レヴィナスの考える「意識」と「出来事」の関係は、「思考とはドラマティックな出来事である」という「存在論は根源的か？」の定式が展開されたものであると位置づけられる。